H-7

ドゥンシャン語のコピュラにおける共時的考察

外賀葵
(京都大学大学院)

1. はじめに

ドゥンシャン語のコピュラには、固有語の wo と漢語からの借用語の shi の 2 つが存在する。本発表では、それぞれの出現環境を分析した上で、wo については存在動詞 wi-との比較の観点から、shi については主語明示機能を持つ可能性について考察を述べる。

2. 前提

2.1 ドゥンシャン語の概要

❑系統：モンゴル語族河湟(かこう)語派

❑話者：ドゥンシャン族

- 中華人民共和国甘粛省臨夏回族自治州及び新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州に主に居住。
- イスラム教を信仰。民族人口は約 62 万人(2010 年)だが、話者人口は少ない(危機言語の一つ)。
- ドゥンシャン語の正書法は持たず、既にモノリンガル話者はいないとされる。

❑音韻：(Field 1997)

- 子音 29、母音 7。音節構造は$(C_1)(C_2)V(C_3)$：C_1≠ŋ, j, w、C_2＝j, w、C_3＝n, ŋ, j, w, (r)。

❑形態/統語：

- 膠着型。SOV 型、対格型。
- 名詞と形容詞には基本的には形態的区別が存在しない。

2.2 ドゥンシャン語のコピュラ

先行研究及び発表者の調査によれば、ドゥンシャン語のコピュラ文には(1)の 4 タイプ、すなわち(a) 固有語 wo のみを有するもの、(b) 固有語 wo と漢語由来の shi が共起するもの、(c) 漢語由来の shi のみを有するもの、(d) コピュラの現れないものがあるとされる。

(1) a. *bi* *dunxian* *kun* ***wo***.
1sg ドゥンシャン 人 「私はドゥンシャン人だ。」

b. *bi* ***shi*** *dunxian* *kun* ***wo***.
1sg ドゥンシャン 人 「私はドゥンシャン人だ。」

c. *bi* ***shi*** *dunxian* *kun.*
1sg ドゥンシャン 人 「私はドゥンシャン人だ。」

d. *bi* *dunxian* *kun.*
1sg ドゥンシャン 人 「私はドゥンシャン人だ。」

しかし、これら 4 タイプは同様の頻度で用いられるわけではない。実際、調査協力者のコメントによれば、「意味の違いはなくどれでも通じるが、(c)は本来的ではない。若い人ほど(c)を用いて話している。」

とのことであった。また(d)の文は、「文法的に間違いではない。」とのことであったが、実際の発話やテキスト資料にはまず見られないものである。これに関しては、Field(1997:356-357)にも同様のことが記されている。

コピュラ wo と shi に関して、先行研究では概ね (2)のように記述されている。

(2) a. wo は文末、shi は文中の位置にしか現れない。
b. shi の使用は義務範疇ではない。
c. 等位・判断・存在・所有等の用法がある。

コピュラについては、いまだ詳細に記述しているものは見られず、wo と shi の実際の出現環境をそれぞれに対する分析は進んでいない。したがって本研究では、2 つのコピュラそれぞれを考察し、従来の記述を精緻にすることを目指す。

以下、本稿で言及する例文中の wo 及び shi には太字と下線を付して記す。

3. 存在の意の固有語のコピュラ wo

本節では、固有語の wo について、その存在用法に着目して考察する。存在の意味を表す形式には、コピュラ wo の他に存在動詞 wi-がある。その出現環境に着目すると、格表示と否定辞の観点において、この 2 つは同様の振る舞いを示すことがわかる。

(3)：存在場所・所有者の格表示を行う場合には、与位格を用いる

a. *he-ni* *ula-de* *mutun* *olon* ***wo.***
3sg-GEN 山-DAT 木 多い 「あの山には木が多い。」

b. *dura* *mer-de* ***wi-nə.***
電灯 道-DAT -NPF 「電灯は道にある。」

c. *made* *nie* *gaga* ***wo.***
1sg.DAT 一 兄 「私には兄が一人いる。」

d. *tande* *yan* ***wi-nə?***
2pl.DAT 何 -NPF 「君たちは何を持っているの？」

存在動詞 wi-は接辞を伴わずに用いることはできないため、(3b) (3d)にあるように、非完了の終止語尾-nə や、(4)に示すように非完了の連体語尾-ku とともに用いられる。

(4) *dura* *wi-ku* *mer* ***shi*** *gao* ***wo.***
電灯 -NPF 道 良い 「電灯がある道は良い。」

次に、否定辞について着目する。コピュラ wo の否定には 2 種類があり、存在の否定を行う場合(5)と等位の否定を行う場合(6)にはそれぞれ別の否定辞が用いられる。

(5)：存在の否定には、否定辞 u が用いられる

tande *tʂiɢan* *usun* ***u*** ***wo***.

2pl.DAT 白 髪 NEG 〈存在〉 「君たちに白髪はない。」

(6)：等位の否定を行う場合、否定辞 pushi が用いられる

ene *ɢoni* ***pushi*** ***wo***.

これ 羊 NEG 〈等位〉 「これは羊ではない。」

続いて存在動詞の否定の例をみる。(7)において(5)と同じ否定辞 u が用いられることに着目されたい。

(7) *dura* ***u*** ***wi-ku*** *mer* ***shi*** *gao* *u* ***wo***.

電灯 NEG〈存在動詞〉-NPF 道 良い NEG 「電灯がない道はよくない。」

(7)では、gao u wo「よくない」の部分にも否定辞 u が用いられているが、(5)と同様、存在の否定である。ドゥンシャン語には名詞と形容詞の形態的区別が基本的に存在しないため、「よさがない→よくない」と捉えられる。

また、コピュラ wo と存在動詞 wi-には、(8)や(9)のように言い換えが可能な場合がある。

(8) a. *he* ***shi*** *yan* ***wo****?*

3sg 何 「あれは何ですか。」

b. *he* ***shi*** *yan* *wi-nə?*

3sg 何 -NPF 「あれは何ですか。」

(9) a. *ene* *alima* *andatu* ***wo***.

これ 果物 美味 「この果物はおいしい。」

b. *ene* *alima* *andatu* ***wi-****nə.*

これ 果物 美味 -NPF 「この果物はおいしい。」

しかし、(9)を否定にした(10)において、b の存在動詞の否定の形式は言い換え表現として用いられない。

(10) a. *ene* *alima* *andatu* *u* ***wo***.

これ 果物 美味 NEG 「この果物はおいしくない。」

*b. *ene* *alima* *andatu* *u* *wi-nə.*

これ 果物 美味 NEG -NPF 「この果物はおいしくない。」

さらに、(9a) (9b) (10a)をそれぞれ疑問文にした例を見てみると、次のようになる。

(9a') *ene* *alima* *andatu* ***wo*** *nu?*

これ 果物 美味 QUE 「この果物はおいしいの？」

(9b') *ene* *alima* *andatu* *wi-nə* *u?*

これ 果物 美味 -NPF QUE 「この果物はおいしいの？」

(10a') *ene* *alima* *andatu* *u* ***wo*** *nu?*

これ 果物 美味 NEG QUE 「この果物はおいしくないの？」

(9b’)の文末に現れている非過去の終止語尾に疑問辞が接続する場合には、(Napoli: 34, table18)でも指摘されているように、-nə u＞-nu の縮約形も存在するため、音声的実現は(9a’)とかなり近くなる。

最後に、過去の存在とその否定についての例をあげる。

(11) a. *fudʐuʁu xieyi asiman-de gieduʁən hodun* ***wo***.
昨 晩 空-DAT たくさん 星 「昨晩、空にたくさんの星があった。」

b. *fudʐuʁu xieyi asiman-de gieduʁən hodun wi-nə.*
昨 晩 空-DAT たくさん 星 -NPF 「昨晩、空にたくさんの星があった。」

c. *fudʐuʁudu asiman-de welen u* ***wo***.
昨日 空-DAT 雲 NEG 「昨日空に雲がなかった。」

(11)に示したように、過去の存在の場合でも、現在未来の存在と同様の形式をとることがわかる。時制を形態的に区別する形式は持たないということがいえよう。

以上から、「存在のコピュラ wo は、存在動詞の異形態」であるという分析を提案する。これは、コピュラ wo を、存在の wo と等位の wo の 2 つに分類し、存在の wo については存在動詞の非接続形という異形態として捉えるという考えである。

表. 3 節のまとめ

〈従来の分析〉		〈本稿の分析〉
コピュラ wo		等位 wo
	➔	存在動詞 wo [非接続形]
存在動詞 wi-		存在動詞 wi- [接続形]

4. 漢語由来のコピュラ shi

本節では、漢語由来の shi についてその出現環境を考察する。発表者の分析によれば、shi の出現環境は概ね(12)の 3 タイプに分類できる。

(12) A: 主語が代名詞あるいは代名詞を含む語句である場合 ➔例(13)
B: 主語が数詞句である場合 ➔例(14)
C: 直前が漢語からの借用語である場合 ➔例(15)

以下にそれぞれの例を示す。2.2 でも述べたように、shi の使用は義務的ではないため、省略しても文意は成立するとされるが、情報提供者が認識していない機能を持つ可能性がないということではない。本節では、shi が持ちうる文法的機能の可能性について言及したい。

(13) a. *ene* ***shi*** *ɢoni* *miʁa* ***wo*** *nu?* — *pushi,* *ene* ***shi*** *fuguer* *miʁa* ***wo.***
これ 羊 肉 QUE NEG これ 牛 肉
「これは羊肉ですか？—いいえ、これは牛肉です。」

b. *ene* *shire* ***shi*** *mutun-ni* ***wo.*** (刘 1981:51,一部表記改、グロス和訳付加)
これ 机 木-GEN
「この机は木製です。」

(14) *ɢua* *jiʁa* ***shi*** *gao* ***wo***.
二 椀 よい 「二杯ならいいよ。」

(15) a. *jinjinji* *futou* ***shi*** *yan* *wi-nə?*
golden axe(<Ch.斧头) what have-NPF
"What is golden axe?" (Napoli 2014:144:16 一部表記改)

b. *antang-i* *sugie* ***wo***.
gold-GEN axe(固有語)
"It is golden axe." (Napoli 2014:144:17 一部表記改)

(15a) では shi の直前が漢語由来の借用語であるのに対し、(15b)では固有語になっており shi は用いられていない。この例から、shi を使用する際に漢語からの影響を受けている可能性が見てとれる。

さらに shi の使用されるデータに対する考察を進めると、とりわけ(16)に示すような一種の強調構文や(17)に示すような主語が長い場合にしばしば用いられることが分かった。

(16) *ene* *kielien* ***shi*** *tʂi* *kielie-san* *wo* *nu?*
これ 話 2sg 話す-PST QUE
「この話は君が話したものか？」 (布和编 1986:162, グロス付加、一部表記改)

(17) " *ene* *ghurang* *moudolo* *oqin-la* *banyesangen-ji* *yimeqie* *yara* *ire-zho*
this three naughty girl-pl late.night-ADVZ so.early why come-IPF
shi *lie* *mejie-nə.*
NEG know-NPF
"These three naughty girls, why coming late in the night, so early, is (something that I) do not know."
(Napoli 2014:122:27,一部抜粋, 一部表記改)

(16)や(17)の分析から言えることは、「shi には主語明示機能がある」という可能性である。直前が漢語由来の借用語でない点も踏まえると、このような場合に shi が用いられやすいということは、何らかの機能を shi が果たしている可能性があり、その機能とは、前の要素と後ろの要素とを切り離して、主語を強調すること、すなわち主語明示機能であると考えられる。

5. まとめ

本発表では、存在の意の固有語のコピュラ wo の分析と漢語由来の shi の持ちうる機能について言及してきた。以下に主張をまとめて述べる。

❑存在の意味を表す形式には、コピュラ wo と存在動詞 wi-の 2 つがあるとされてきたが、存在場所・所有者の格表示を行う場合に両者とも与位格を取る点、コピュラ wo が存在の意味の場合、等位の場合とは異なる否定辞を取る点に注目し、「存在のコピュラ wo は、存在動詞の異形態」であると述べた。

❑shi の出現環境の分析により、主語が代名詞あるいは代名詞を含む語句、主語が数詞句、直前が漢語からの借用語の場合の他、とりわけ一種の強調構文や主部が長い場合にしばしば用いられることが多いことから、「shi には主語明示機能がある」という可能性を提示した。

6.おわりに

本発表では、ドゥンシャン語のコピュラの記述を精緻にすることを目指したが、幾分不十分な点もあった。まず、コピュラ文の定義や扱うべき用法について詳細な吟味に欠ける部分がある。先行研究と自身の調査によるデータを分析対象としたため、データ量が限られていた点も不十分であった。今回は共時的な考察にとどまったが、コピュラの全体像を把握するためには、モンゴル諸語、中でも河湟諸語において比較を行い、通時的観点からも考察を加える必要がある。また、漢語由来の shi については、出現環境に焦点を当てたが、非出現環境には十分な考察を与えることができなかった。逆の視点からも捉え直すことで、さらなる精密な分析を試みたい。漢語の shi とどのような違いが見られるかといった点も合わせて今後の課題としたい。

略号一覧

1：1 人称 / 1st person	2：2 人称 / 2nd person	3：3 人称 / 3rd person
-：形態素境界 / affix boundary	sg：単数 / singular	pl：複数 / plural
ADVZ：副詞化 / adverbalize	DAT：与位格 / dative	GEN：属格 / genetive
IPF：未完了 / imperfective	NEG：否定 / negative	NPF：非完了 / non perfective
PST：過去 / past	QUE：疑問辞 / question	

引用文献

Field, Kenneth L. 1997. A Grammatical Overview of Santa Mongolian. PhD dissertation. University of California, Santa Barbara.

Napoli, Mateus Froes. 2014. Studies on the Verb Complex of Santa Mongolian. M. A. thesis. Payap University, Chiang Mai, Thailand.

布和编 1986.《蒙古语族语言方言研究丛书 007 东乡语和蒙古语》呼和浩特: 内蒙古人民出版社考文献

刘照雄编 1981.《中国少数民族语言简志丛书 东乡语简志》北京:民族出版社